

飲水思源

- 元留学生の「恩返し」が台湾に留学する日本人対象の奨学金に -

When You Drink Water, Think of Its Source:

Alumni Who Studied in Japan Made a Scholarship Program for Japanese Students

Studying in Taiwan as Being Grateful

公益財団法人ロータリー米山記念奨学会学務・学友担当 **武本 泰子**

TAKEMOTO Yasuko

(Scholars and Alumni Department, Rotary Yoneyama Memorial Foundation)

キーワード：台湾留学、奨学金、ロータリークラブ、海外留学

1. かつて日本に留学し奨学金を受けた元留学生たちが設立した奨学金制度

「飲水思源」は台湾の元米山奨学生の合言葉です。元米山奨学生（以後「米山学友」と表記）というのは日本留学時に「ロータリー米山記念奨学金」を受給した留学生のことです。彼らは台湾に帰国し、台湾米山学友会という同窓会を組織しています。

「飲水思源」水を飲めば、源を思う。今自分たちがあるのは、日本留学の苦しい時を物心両面から支えてくれた日本のロータリーのおかげ。その思いが形になったのがこの奨学金「台湾米山学友会日本人若手研究者奨学金」なのです。

「台湾米山学友会日本人若手研究者奨学金」は台湾の大学や大学院に正規に入学する日本人が対象で、これから留学する方、すでに台湾に留学している方、いずれも申し込むことができます。

最大の特長は、奨学生ひとりひとりに米山学友がカウンセラー（相談役）としてつき、精神面のサポートをしてくれることです。台湾米山学友会の創立は1983年1月で、日本内外で38ある米山学友会のなかで最も古い歴史を持ちます。2002年には台湾で社団法人¹の許可を得ました。社団法人の初代理事長は徐重仁氏。台湾流通業界の父として「国家傑出経営者賞」最優秀賞の受賞歴もある著名人

¹ 台湾米山学友会の台湾での法人としての名称は社団法人中華民國扶輪米山會です。

です。台湾の米山学友の数は3,406人（2015年5月現在）で、中国、韓国に次ぐ多さです。最初の奨学生は1960年からの支援で、もう55年も前のことです。歴史がある分、台湾の米山学友はすでに台湾で社会的に高い地位を確立した方が多くいるのも特徴です。留学において、企業の経営者や医師など社会の第一線で活躍する現地の実業人と知り合う機会を持つことは簡単ではないでしょう。

この奨学金はそこが最大の魅力であり、普通の留学では出会えない人々に出会い、味わえない経験が奨学生を待っています。これまでにこの奨学金で支援した日本人留学生は14名。皆、米山学友たちとの出会いを通じて、多くのことを学んでいます。この米山学友の中には帰国後ロータリークラブに入会し、ロータリー会員になった方も多くいます。

第六期奨学生の関口大樹さんは言います。「この奨学金でしか得られなかった交流があります。様々な職業で、台湾社会で活躍する方々のお話や体験を伺うことは、学校では学べないことです。そして同時にそうした方々に失礼のないように礼儀や振る舞いを磨こうと努めることで、人間として成長できる気がします」と。米山学友たちは彼を家族のように大切に見守り、台湾留学の成功を応援します。

米山学友たちにはロータリーの理想とする「奉仕の精神」が心に根付いています。東日本大震災での多額の義捐金を始め、日本で受けた恩を返そうという思いが常に心にあるのです。

台湾米山学友会日本人若手研究者奨学金

応募資格：

- ① 日本国籍を持つ者
- ② 台湾の大学、大学院修士課程または博士課程に正規生として入学する予定のある者。あるいはすでに正規生として在学している者。
- ③ 35歳未満

（詳細は公益財団法人ロータリー米山記念奨学会ホームページ掲載の募集要項をご覧ください。）

<http://www.rotary-yoneyama.or.jp/taiwan-scholarship>

奨学期間： 9月～翌年8月までの12ヵ月

奨学金額： 月額25,000台湾ドル ※入学金、授業料、宿泊費は個人負担

補助費： 海外往復航空券（エコノミークラス）と奨学金期間中の健康保険加入料の実費合計（上限50,000台湾ドル）

選考スケジュール： 6月30日（申込書類必着：公益財団法人ロータリー米山記念奨学会あて）
7月上旬書類審査、8月初旬可否発表

選考方法： 台湾学友会の選考委員会において、書類選考を行う。

採用実績： 合計14名（2016年は2名募集の予定です）

2009年（第一期）	1名（国立政治大学大学院）
2010年（第二期）	1名（国立台湾師範大学大学院）
2011年（第三期）	2名（国立台湾大学、国立高雄師範大学）

2012年（第四期）	2名（国立台北教育大学大学院、国立台湾大学）
2013年（第五期）	2名（共に国立台湾藝術大学大学院）
2014年（第六期）	2名（国立政治大学大学院、国立台湾師範大学大学院）
2015年（第七期）	4名（国立政治大学、同大学大学院、東海大学、国立高雄第一科技大学）

2. ロータリー米山記念奨学会とは

ロータリー米山記念奨学会は日本の大学や大学院、専門学校などに留学する留学生に対し、ロータリークラブ会員からの寄付を原資にして奨学金を支給する団体です。1967年に財団法人、2012年に公益財団法人の認可を得ています。

これまでに支援した留学生の数は123の国と地域から18,000人を超えています。その起源は1952年まで遡り、その設立背景には第二次世界大戦の終戦がありました。戦後、東京ロータリークラブで、当時の会長古沢文作氏によって立案されたのが、日本に留学する留学生のための奨学事業、「米山基金」構想でした。「米山」というのは、日本最初のロータリークラブである東京ロータリークラブを設立し、「日本のロータリークラブの父」と呼ばれる米山梅吉氏の名前からとったものです。

ロータリー米山記念奨学事業の使命は、「将来、日本と世界とを結ぶ『懸け橋』となって国際社会で活躍し、ロータリー運動の良き理解者となる人材を育成すること」です。二度と戦争の悲劇を繰り返さないために国際親善と世界平和に寄与したい。そのために、海外から優秀な留学生を迎え入れて、平和日本を肌で感じてもらいたい。そんな当時のロータリー会員たちの強い願いがありました。

※米山梅吉氏と東京ロータリークラブについては本記事の最後に記載

3. ロータリークラブとは

ロータリークラブとは、事業および専門職務に携わる人々が世界的に結びあった世界初の奉仕クラブ団体です。人道的な奉仕を行い、あらゆる職業において高度の道徳的水準を守ることを奨励し、世界理解と平和を目指して尽力しています。1905年、アメリカのシカゴで最初のクラブが誕生し、会合を会員の事務所で「輪番制」で開いたことからロータリークラブと名付けられました。現在、200以上の国と地域に35,000を超えるクラブがあり、120万人以上の会員がいます。松下幸之助やジョン・F・ケネディ、マーガレット・サッチャーもロータリアン²でした。

奉仕をするロータリアン個人の集まりがロータリークラブとなり、世界各地のロータリークラブの連合組織が国際ロータリーです。国際ロータリーには「ロータリー財団」という基金が設立され、「国際親善奨学金」やポリオの撲滅などの様々なプログラムが実践されています。

² ロータリー会員のことをロータリアンと呼びます。

4. 台湾米山学友会

飲水思源の言葉に従って、ルーツを掘り下げて行きましたが、ここで奨学金に話を戻します。この奨学金の発案者である許國文氏³はその提案について次のように話しています。

「台湾にも米山記念奨学会と同じように、『中華扶輪教育基金会』があります。台湾のロータリアンの寄付による国内大学の修士課程、博士課程の学生のための奨学金ですが、その対象は台湾籍の学生に限定されています。そして、私は元米山奨学生が、仕事においてある程度成功した後、ロータリアンであろうがなかろうが、米山記念奨学金に感謝の心を持たなければならないと思っています。その思いから、恩返しの気持ちを込めて、米山記念奨学金に倣い、外国人を台湾留学に招き、台湾の文化・風俗・歴史などを理解してもらい、国際交流と世界平和を促進したいと考えました。もちろん、まずは日本から留学生を招こうと思いました。」

こうして日本人を対象とした奨学金制度の原案が台湾学友会総会⁴で発表されると、学友皆が賛成し、2009年9月、第一期奨学生1名の採用となりました。

当時の理事長（学友会会長）、阮允恭さん⁵は言います。「企業に大きな寄付を頼めば基金は増えるが、それでは私たちの気持ちが飛んでしまう。ひとりひとりが恩返しの気持ちで寄付を出し合い、実現することに意味がある。徐々にその気持ちを広げて、台湾全土に米山の花を咲かせたい。」



2015年12月19日開催 台湾学友会総会にて @台北

³ 許國文氏（キョコクブン） 中華民國扶輪米山會第五代理事長、財団法人羅許基金会羅東博愛病院 理事長、羅東西ロータリークラブ設立メンバー、05-06年度国際ロータリー第3490地区ガバナー

⁴ 年に一度、台湾米山学友の集まる総会（同窓会）が台北で開催され、日本や中国からも参加します。

⁵ 阮允恭氏（ゲンインキョウ） 中華民國扶輪米山會第四代理事長、瑞鋼貿易（股）公司 總經理

5. 奨学生になって

この「台湾米山学友会日本人若手研究者奨学生」になると、台湾学友会の理事会に出席し、そこで奨学金が渡されます。合格後初めて台湾学友会の役員に会う日本人奨学生は緊張します。その緊張をほぐしてくれるのが、米山学友たちの笑顔と日本語です。そして、大きな名前入りの旗で大歓迎されます。日本留学を経験し、台湾国内で活躍する米山学友たちは、日本人留学生の気持ちが分かります。人脈も豊富で、研究のアドバイスもしてくれます。

第四期奨学生 名嘉百子さんは、親子のように接してくれる台湾の米山学友との出会いについて次のように話しています。



第四期奨学生：左、許國文中華民國扶輪米山會理事長（当時）：右

「一人の人と出逢えば、また一人、二人、三人と、石を投げた水面が波打つように、人との繋がりが広がります。皆さんは親心のような温かい気持ちで見守ってくれます。また、社会人としてのマナーや日台双方の常識も教えてくれます。年を重ねるにつれ、親心をもって諭し導いて、チャンスを与えてくれる人の数は年々少なくなっています。だからこそ、台湾米山学友会を通じて知り合うことができた方々は私にとってかけがえのない存在で、そのお一人お一人との繋がりを大切にしていきたいと思うのです。そして、いつか私のような境遇の方がいれば、今度は私がその縁を繋げられるよう米山学友会での活動を是非ともお伝えしたいと思います。」



台湾美化活動にも参加

彼女はこの言葉通り、台湾留学を目指す後輩にこの奨学金のことを伝え、その後輩はこの奨学金に申込み、見事合格、第七期奨学生となりました。第七期奨学生のうちのひとりの指導教官は偶然にも台湾の米山学友です。ロータリー米山記念奨学事業から生まれた縁は次の縁につながり、民間交流から始まる国際親善に貢献しています。

もうひとり、第六期奨学生、三浦崇志さんからのメッセージ「これから奨学生となるみなさんへ」をご紹介します。

台湾米山奨学生として選んでいただけた事は本当に幸運でした。金銭面だけではなく精神面においても米山学友会の皆様や他の奨学生の方々に支えていただき、十分な余裕をもって台湾での生活を送ることができているからです。台湾へ来る前、物価の違いから生活面において金銭面であまり苦労しないと耳にしたことがありましたが、それは少し違います。学生生活以外にも大学院生は研究に必要な費用、更に学外の活動に参加する義務があります。そのために台湾人学生は普段アルバイトをして大学院生活を営んでいます。しかし我々日本人学生はアルバイトに割く時間はありません。なぜなら毎日勉強していてもテスト前になると時間が足りないと感じるほど授業についていくことが困難だからです。金銭面での援助があるということは台湾での生活が長くなるほどありがたい事なのです。

奨学生として経験できることすべてが将来にとって大きな影響を持つことは間違いありません。私の場合、この一年を通じてロータリークラブの活動に参加し多くの経営者の方々とお話しをする機会を得てきました。それは、台湾社会で成功するためのより実践的な知恵を学べただけでなく、研究や卒業後の計画をより具体的に設計できる大きなきっかけとなっています。



第五期、六期奨学生と第六代理事長家族とともに

6. 支援の広がり

開始当初は年1名の採用でしたが、第三期は2名となり、第七期は4名の採用となりました。

台湾の米山学友が「恩返し」を形にしたこの奨学金への賛同の輪は、台湾米山学友だけでなく、日本のロータリアンや、その家族にも広がっています。

また、第七期（2015年度）採用数の増加にはひとりの台湾人ロータリアンの寄付が大きく影響しています。そのロータリアンは、「日台間の親睦関係を一層深めるためには、両国の新世代にお互いの文化を理解させることが重要である」と言っています。ロータリーには新世代育成のプログラムがいくつかありますが、ロータリー米山記念奨学事業は日本のロータリー独自の事業です。

米山学友ひとりひとりが、日本と世界とを結ぶ『懸け橋』となって国際社会で活躍し、ロータリー運動の良き理解者となるよう努力しています。また、海外にある6つの学友会（台湾、韓国、中国、タイ、ネパール、モンゴル）のうち、台湾と韓国を除く4つでそれぞれの母国の学生を対象にした学友による奨学金支給実績があります。また、台湾と韓国にもロータリーの奨学金制度があり、多くの学友がロータリアンとなってそれを支えています。

米山学友たちの「恩返し」は日本のロータリアンへだけでなく、母国・地域の発展や次世代の人材育成へ「恩送り」として実践されているのです。

米山梅吉氏と東京ロータリークラブ

米山梅吉氏（1868－1946）は、幼少にして父と死別し、母の手一つで育てられました。16歳の時、静岡県長泉町から上京し、働きながら勉学に励みました。20歳で米国へ渡り、8年間の苦学の留学生活を送りました。

帰国後、文筆家を志して勝海舟に師事しますが、友人の薦めで三井銀行に入社し常務取締役となり、その後、三井信託株式会社を創立し取締役社長に就任しました。信託業法が制定されると逸早く信託会社を設立して、新分野を開拓し、その目的を“社会への貢献”とするなど、今日でいうフィランソロピー(Philanthropy)の基盤を作りました。



晩年は財団法人三井報恩会の理事長となり、ハンセン病・結核・癌研究の助成など多くの社会事業・医療事業に奉仕しました。また、子どもの教育のために、はる夫人と共に私財を投じて小学校（現在の青山学院初等部）を創立しました。“何事も人々からしてほしいと望むことは人々にもその通りせよ”これは米山梅吉氏の願いでもあり、ご自身の生涯そのものでした。“他人への思いやりと助け合い”の精神を身もって行いつつ、そのことについて多くを語らなかった陰徳の人でした。

三井銀行の重役だった1918年、「財政調査団」メンバーとして渡米。テキサス州ダラスでロータリー運動に感銘し、ロータリー精神と組織の研究に努めましたが、当時の日本は、第一次大戦に連合国側として参戦。ロータリー精神が受け入れられる環境ではありませんでした。それでも米山氏の情熱によって1920年、日本で最初のロータリークラブとなる東京ロータリークラブが誕生します。関東大震災では世界のロータリークラブから寄せられた義捐金での大掛かりな社会奉仕活動も実行しますが、第二次世界大戦が勃発し、戦火が激しくなると、アメリカ発祥のロータリークラブは日本国内で様々

な誤解と批判を受けます。1940年9月11日「奉仕の理想の堅持」を胸に、東京ロータリークラブは国際ロータリーを脱退、解散します。

東京ロータリークラブのメンバーたちは解散後も会合を続け、戦時中も傷病兵や留守家族の慰問、孤児の救済といった奉仕活動をしていました。

1945年8月15日、戦争が終結。国際ロータリーへの復帰運動が始まります。復帰が認められたのは1949年のことでしたが、悲願であったその復帰を見ることなく、1946年、米山梅吉氏は没します。